

<b>Title</b>	石津靖大氏報告「興について」（＜児童＞における「総合人間学」の試み研究）
<b>Author(s)</b>	田澤, 薫
<b>Citation</b>	総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.1, 2011.6 : 5-7
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3070">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3070</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 〈児童〉における「総合人間学」の試み研究

### 石津靖大氏報告「興について」

田澤 薫

「子どもの『領分』研究」を共通テーマとする今年度の〈児童〉における「総合人間学」の試み研究会の第5回研究会が2月23日(水)18:00～20:00、聖学院大学第二会議室において開催された。今回は、石津靖大氏（聖学院大学児童学科）に「興について」と題した報告をいただいた。報告の概要は以下の通りである。

「興（きょう）」については、2年前ほど前に海外に発つ家族を一人で空港に見送りに行った日の日記に、「飛び立っていくのを見送るのが「興」。白川（静：註）先生の言うところの詩経、万葉集の興の精神なのだ。そうだったのか」と書いたことが想起される。

「動機づけ」の一つに興味、関心がある。興味の「興」の字には「同」が含まれている。保育系の学科に所属することになったとき、保育の領域でよく言われる「興味があるから遊ぶ」とか「興味が無いから遊ばない」ということがよく分からなかった。「興味が無いので遊ばない」とはどういうことなのか。そこで、字からこの問題を考えることにした。

「興」の上部中央は「同」。その両側は「キョク」といって手を意味する。下の部分は、下側から手を出している意である。白川先生によれば、上と下から、時によると前後から「同」を持っているといわれる。『字統』にも「興」の「同」の部分はいわゆる神興とされている。一番古い「興」は甲骨文の字で「同」を下から両手で持っていると言われているが、それが同じ甲骨文でも少し時代が下がると「同」を上から持っていると言われ、「同を持っている」のではなくて興を担いでいる、つまり共同して担いでいると説明されている。転じて心が高ぶる、感動する、喜ぶという意味をもつ。

白川先生の仕事は『字統』、『字訓』、『字通』と

いう大きな辞典にまとまったが、その辞典になる前に「興の原義」という小さな文章がある。1980年に刊行された講談社学術文庫『中国古代の民族』に「興の原義」は収められている。ここでは、「興」の「同」は酒器だと説明される。形から明白だが、酒器は伏せられている。つまり、酒器を逆さにしてお酒を土地にふり注いでいるという字形であるという。中国の古代の民族の灌祭については礼記に記述がある。「灌地の礼」として大地にお酒を注いでいる様子をこの字は表している。なぜ大地にお酒を注ぐのか。これは、その土地の神霊を呼び起こしているのであり、なるほど「興」には「興す（おこす）」という意味がある。土地の神霊を呼び起こすことによって応えてもらうために「興」という祭りをしたと考えていいだろう。

「釁（きん）」については、白川先生は上の部分は「興」であるといわれる。下の部分は「酉（ゆう）」でさんずいをつけたら酒になるのでお酒の意味である。その下の部分は「分ける」という字であるから、これはお酒を人にかけている意である。「キンモク」とか釁浴という、釁礼という儀式が残っている。「興」との比較で言えば、儀式としてお酒を人にかけるときは「釁」で、これを大地にかけるときは「興」だという説明になる。

沖縄の祭りを撮った写真家に比嘉康雄先生がいる。比嘉先生の生の祭りは、あるものの記憶の名残だという捉え方がある。深いところにあるために本体は分からないものの、きっかけになる記憶の名残が比嘉先生の写真の動機だという理解である。ここでいう記憶の名残という断片は、日本の祭りの「底」である。祭りは何かの記憶であって、さらにそこから記憶の底に下りていく。「興」の字形は何かの記憶である。この字ができる前からずっとあるものの記憶の名残である。「興味が無いから遊ばない」という課題に取り組むときに、

「興」の中に記憶があるという理解が成り立つ。

藤田省三先生が亡くなった時に、高島通敏先生が朝日新聞に「時代と格闘した自由な精神」と題する弔辞を出されたが、次はその一節である。

「豊かな社会に自足し、安楽への全体主義にひたっている現代日本は、…しかし、その中で彼（藤田省三先生：報告者注）は、隠れん坊という人類共通の子どもの遊びに敗者を包み込む自由な相互主義の精神の原型があり、現代の子どもがその遊びを喪失したことが生活の全体主義を蔓延させていることを非常に軟らかい文章で書いた」

ここでいわれている「隠れん坊」とは藤田先生の『或る喪失の経験—隠れん坊の精神史』（1981年）を指す。同書の「おとぎ話」に関する言説によれば、おとぎ話は「かつての古典的な祭式の構造体」から発したこと、「実在性の力説強調を放棄して、非実在的に経験の存在を示す方法を身につけた」ことの指摘がある。「あったか、なかったかは知らねども、あったこととして聞かねばならぬという話し方がそこに生まれた」と言われ、その主題を子どもの世界で展開するのがおとぎ話であると述べられている。藤田先生のいうところの「かつての古典的な祭式の構造体」という箇所研究動機を得た。例えば昔話の桃太郎には「じいさん山へ芝刈りに、ばあさん川へ洗濯に」とあるが、これが「興」ではないか。「山へ芝刈りに、そして川へ洗濯に」という、この言葉が記憶している古代の人々の信じ方をこの言葉は持っている。それでは、桃太郎の中で何が主題として呼び起こされたのか。そして、それに応えて現れてきたものは何であったか。現れてきた桃は何なのか。桃太郎の昔話の一番大事な部分は「じいさん山へ芝刈りに、ばあさん川へ洗濯に」だろう。あとは、その説明にすぎない。「おとぎ話はかつての古典的な祭式の構造体」なのである。

藤田省三先生は1971年3月に法政大学教授を依頼退職して、猛烈な勢いでいろはの「い」から勉

強のやり直しを始めたという。白川静の『設文新義』を座右に置きながら史記を漢文原典で精読した、と。実は、1971年に『説文新義』を手に入れるのは困難である。これはある小さな勉強会のための授業案で、白川先生がガリ版を切って謄写板で刷って用意されたものを1969年に五典書院から刊行した。それを藤田先生が1971年の前に入手されたことに驚かされる。藤田先生の『隠れん坊の精神史』の背景にも、白川先生の研究成果が影響を与えていると思われる。

森下みさ子先生が、以前のこの研究会の菅原啓州先生による「くまのプーさん」の報告の回に、「子どもにとって親和な関係にある階段というものを媒介にして身と体の差異をあぶり出した」という見事な表現をされた。また、菅原先生は石井桃子著『幼ものがたり』を最高の一冊として挙げられたが『幼ものがたり』も記憶である。わずかな記憶から階段を下りていく、精神の底についていくという共通点がある、と思われる。

白川先生は60歳の1970年に岩波新書から『漢字』を刊行して広く読まれた。同時に中公新書から『詩経』を出した。つまり文字と歌謡の本が同時に出版されている。1962年に発表された「興の研究」（立命館大学大学院修士課程授業案：本論文で京都大学から学位授与：『白川静著作集』所収、2000年）はガリ版で、『稿本詩経研究』（通論篇、解釈篇、1960年：立命館大学大学院の授業案）の別冊付録として出された。つまり、歌謡である詩経研究における、歌の「興」に関する研究ということになる。それ以前の白川論文は、完全に古代文字の研究である。白川先生は、古代の祭祀研究にも取り組まれた。「興」は灌地の礼だという理解もここから生まれている。祭祀と習俗は関わりがある。文字に関して、文字学では迫れない歌謡から分かることが多くあるということが『詩経』で気づかされる。白川先生は1979年に『初期万葉論』（中公文庫）を出した。万葉集は、中国の詩経に匹敵する日本最古の歌謡である。白川静とい

えば漢字学者として知られているが、本書から白川先生は万葉集の研究家だと確信される。万葉集を研究するために詩経を研究し、詩経に取り組むために徹底した古代文字の研究が必要だった。なぜ万葉集を研究するかといえば、古事記や日本書紀では分からない日本人の精神の底が、普通の人の生活が謡われている万葉集からは知れるからだろう。

詩経研究・万葉集研究において、白川先生はたびたび「興の発想」という表現を使う。それはどんなものか。よく引用されるのは詩経の一番最初に出てくる有名な歌である。

「關關（かんかん）たる雉鳩（しよきゅう）河の洲（あ）にあり、窈窕（ようちょう）たる淑女、君子の好逑」これが1番目。2番目は「參差（しんし）たる苜蓿（こうさい）は左右に之をとる」そして「窈窕たる淑女は寤寐（ごび）に之を求む」

松本雅明氏は、詩経の風潮をふまえて詩経において「興」はどんなものかという検討に取り組み、詩経の中の「興」は気分象徴を表しているという感覚的に解釈する説を唱えた。一方で白川先生は、「關關たる雉鳩」を「鳥が鳴いていることを歌っている」として、特に渡り鳥に対して定まった時期に先祖が必ず帰ってくるという考え方があったことから、鳥が鳴いていることが先祖の魂の帰還を祀るということと呼び起こす動機となっていると説明している。

万葉集の八巻の一四二七に「明日よりは春菜摘まむと標（しめ）し野に昨日も今日も雪は降りつつ」、「難波辺に人の行ければ後れ居て春菜摘む子を見るがかなしさ」とある。願い事を成就するために、神様への約束として決められた（示した）日時に注連縄で決められたその若草を摘んで籠いっぱいにするはずが昨日も今日も雪が降ってできない、という歌意である。願い事を成就させることが「春菜摘む」ということなのである。詩経の「卷耳」は、ハコベの一種でネズミの耳といわれる植物の「卷耳」を摘む歌で、「卷耳を采（と）

り采るも頃筐（けいきょう）に盈（み）たず、嗟（あ）あ、我人を懐（おも）うて彼（か）の周行（しゅうぎょう）に眞（まこと）く」とある。やはり草摘みだが、人を懐うて周行（道路）に置く。摘んでいる女性の関係するその人が行った道に置くという意味である。卷耳の草を採るという言葉は、実はその言葉自身が「願い事がききますように」という呪い言葉であり、この言葉の前に草を採るという行為がある。そして、それを歌に詠むというそのことも呪能を持つと白川先生は言いたかったと思う。

最初に紹介した日記のように、飛立つ家族を見送る行為を歌に詠み、それが神霊を呼び起こして神霊がそれに応えるということを感じていた時代がかつてあった。折口信夫先生がよく言う言霊である。言葉はその通りであるという。「興」という字の形が、呼び起こして主題を応えさせることが「興」であると信じている。すなわち、「興」は動かないものも動かす。動かないものを動かす方法が「興」で、その方法によって動かないものが動くことが「遊（ゆう）」である。つまり、「興」がないとなぜ「遊ばない」のか「遊べない」か、ということである。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科准教授）